HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オンライン授業におけるビブリオバトルの試み ： 中級日本語クラスでの実践から
Author(s)	山本, さやか; Yamamoto, Sayaka
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 24, 84-103
Issue Date	2021-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80916
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_5.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

報告４

オンライン授業におけるビブリオバトルの試み
―中級日本語クラスでの実践から―

山　本　さやか

要　　旨

本稿は、中級理解（運用）クラスにおいて、書評ゲーム「ビブリオバトル」をオンライン授業の中で実践した報告である。普段教室で行っている実践をオンライン上で行った結果および今後の課題について明らかにすることを目的としている。今期はオンライン授業でコミュニケーション機会が限られたため､学習者には通常の教室授業時よりさらに｢相手の立場に立った発表」をするよう働きかけた。その結果、オンライン上ゆえの限界があるものの、学習者はそれぞれ工夫を凝らし相手の立場にたった発表を行うことができた。またこの活動を通じて日本語で本を読む楽しさを知り、聞き手との深い議論をすることができた。本実践の結果から、オンライン上であってもビブリオバトルは中級日本語学習者にとって総合的な日本語力訓練のための意義ある活動になることが示唆された。

〔キーワード〕ビブリオバトル、中級日本語学習者、遠隔授業、聞き手への配慮

1.　はじめに

本稿では、2020年第１学期の中級理解（運用）２クラスにおいてオンラインで実施したビブリオバトルの実践を報告する。一般日本語コースの中級授業には「やりとり」「理解」「表現」の３つのモードが設定され、さらにそれぞれが基礎的なスキルの習得を目標とする基礎クラス、基礎クラスで学んだスキルを用いて具体的な活動を行う運用クラスに分かれている。本稿で述べる理解（運用）２クラスは「理解」モードの中級中期レベルにあたる。

中級理解（運用）２が目標とするスキルとして、以下３つが掲げられている。

（1）様々なジャンルのまとまった発話や会話、文章を理解することができる。
（2）目的や内容に応じて様々な聞き方や読み方を使うことができる。
（3）内容のポイントを確実に理解することができる。
（「北海道大学日本語スタンダーズ2019年度版」）

これらのスキルを養うため本実践では主に生教材を用いて２つの活動を行った。一つは身近なニュースについて要点をまとめ、かつそのトピックついて話し合い理解を深める活動、またもう一つは書評ゲーム「ビブリオバトル」の活動である。今学期は新型コロナウィルス感染予防のため、遠隔会議システムZoomとGoogle Classroomを用いた遠隔授業ですべての活動を実施した。オンライン授業では、教室での対面授業と異なり、学習者同士、学習者と教師のコミュニケーション機会が限られる。本稿はそのような環境の下で全16回の授業の後半に実施したビブリオバトルの実践について報告する。通常は教室で行うビブリオバトルをオンライン上で実施した結果と今後の課題について考察したい。

2.　授業の背景と目的

2.1　日本語教育におけるビブリオバトルの位置づけ

ビブリオバトルとは、複数の発表者が各々選んだ本を紹介した後、聞き手が「一番読みたくなった本」に投票し、最も多く票を得た本が「チャンプ本」として選ばれるという書評ゲームである。泉村・青山（2014：39）によると、ビブリオバトルは「書評を通じたコミュニケーションの場づくり手法」でもあり、人を通して本を知る「読書推進に役立つ手法」である。近年、書店や公共図書館、企業内研修、学校現場で、読書の推進だけでなく、スピーチの訓練の場、コミュニティの関係作りの場として活用されている。

ビブリオバトルは日本語教育では現在、どのような位置づけになっているのだろうか。深澤（2017）は、大学教育において、グローバル化が進む社会を生き抜いていくために必要な力、およびコミュニケーションや協働により新たな価値を生み出す「21世紀を生き抜くための21世紀スキル」[1)]を育成する必要性があると述べている。さらに留学生がこれらの力を身に着ける場として、大学の日本語教育においてビブリオバトルが取り入れら

れつつあることを指摘する。また山路他（2013）によると、ビブリオバトルのゲーム性が参加する学生のモティベーションを高め、聴衆の理解や共感に対する配慮をもたらし、日本語学習者のパブリックスピーキング技能向上に有効であることが示唆されている。このように、現在、ビブリオバトルは日本語教育において、話し手と聞き手のやりとりと交流による相互理解の促進、スピーチ能力の向上といった面から導入が進んでいることがわかる。

2.2　中級レベルの学習者にとってのビブリオバトル

ここでは中級レベルの授業でビブリオバトルを導入する意義について２つの面から考えたい。中級学習者は初級学習者と異なり、自身で目に見えた日本語の上達を感じにくいと言われる。したがって、中級学習者に対しては、現在の力より一段上のレベルに挑戦できる活動が必要である。それをやり遂げることで、学習者が学びの実感を得られることが重要ではないだろうか。中級レベルの学習者の多くは、読んだ本のあらすじについては伝えられるが、表現を駆使して本の魅力を深く相手に訴えることはまだ難しい。一方、ビブリオバトルは発表の上手・下手ではなく、どの本が読みたくなったかで勝敗が決まる。つまり聞き手の「共感」が得られるスピーチをすることが得票につながる（辻本2019）。自分が選んだ本をじっくり読み、その良さについて表現を創意工夫し相手に訴えるビブリオバトルは中級レベルの学習者にとって、現在の日本語力の一歩先に進む挑戦であると考える。

また、学習者自身がその活動に挑戦しやすいことも大切な要素であろう。中級レベルのクラスでは学習者間の日本語力の差が問題になりやすいが、山路他（2013）はビブリオバトルについて、参加者が自分の興味と日本語レベルに合った本を選べるため、テーマに対する興味や知識の差にモティベーションが影響されにくく、日本語レベルに差があるクラスでも実施可能であることを指摘している。

以上述べた中級学習者にとって学びの実感が得られ、かつ挑戦しやすいという２点から、ビブリオバトルを中級の日本語授業に取り入れる意義は大きいと考える。本実践においてもこの２点を念頭に授業を組み立てた。

2.3　本授業におけるビブリオバトルの実践

ビブリオバトル公式サイトによると、ビブリオバトルの手順は以下の通りである。

（1）参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
（2）順番に一人５分で本を紹介する。
（3）各々の発表の後に、参加者全員でその発表に関するディスカッションを２～３分行う。
（4）全ての発表が終了した後に、参加者全員が一番読みたくなった本に投票し、最多票を集めたものを「チャンプ本」として選ぶ。
（「知的書評合戦ビブリオバトル　公式ウェブサイト」）

以上が公式ルールだが、このルールは日本語母語話者向けのものである。今回は中級日本語学習者向け授業での実践であるため、学習効果を上げる観点、またクラス内の日本語力のレベル差に対処する点から、ルールを変更して実施した。また(２)－(４)をオンライン授業で実施する際、発表者と聞き手が直接顔を合わせられないため、臨場感に欠け、発表が伝わりにくいのではないかという懸念があった。そこで、これらの問題点を克服するため、本授業では3.4節にて後述する独自のルールのもとでビブリオバトルを実施した。よって、本実践は公式ビブリオバトルの規格とは外れており「ビブリオバトル的実践」であったことを先に述べておく。以下３節に今回のビブリオバトルの実践についてまとめる。

3. オンライン授業の実践内容

3.1　授業概要

先述の通り、授業にはZoomを用いた。課題や振り返りシート、アンケートはGoogleフォーム、ドキュメント、スプレッドシート、図形描画で作成し、それらの配布や回収はGoogle Classroomを使用した。Zoomのチャット、ホワイトボードを使った意見のやりとりも活用した。学習者は６名であり、比較的早い段階で学習者同志が仲良くなり、アットホームな雰囲気の中で意見交換ができるクラスであった。

学習者の受講理由について、授業初回に口頭で聞き取りを行ったところ、最も多かった理由は読書に関するものだった。４名が「本を読むこと

が好きだから」「日本語で書かれた本を読んでみたいから」、２名が「日本語のニュースに挑戦してみたいから」と回答した。なお６名全員がまだ日本語で本を読んだことがなく、今回のビブリオバトルは彼らにとって日本語で本を読むという未知の挑戦でもあった。

表１は全16回の授業の主な内容をまとめたものである。授業内容は前半と後半に分かれている。前半の９回は主に身近なニュースを用いた活動とビブリオバトルの準備①を行い、後半７回にビブリオバトルの準備②と発表、振り返りを行った。以下、前半と後半に分けて授業内容について述べる。

表１　全16回の授業内容

回	主　な　内　容
前半 １～９	１．身近なニュースに親しむ（要約⇒発表⇒振り返り）
	２．ビブリオバトル準備①
後半 10～16	３．ビブリオバトル準備②
	４．ビブリオバトルをしてみよう（発表⇒振り返り）

最後に評価について述べる。本授業では日本語を使用した活動をしながら応用力をつけることを目的とするため、学習者の成果物と発表に評価の重点を置いている。内訳は、ニュースの要約と発表40％、ビブリオバトルの発表40％、授業への参加度20％である。

3.2　オンライン授業で工夫した点

ここではオンラインでビブリオバトルを行ううえで心がけたこと２点について述べる。

まず１つ目はオンライン上での話し手と聞き手のコミュニケーション方法の工夫である。小池（2002）はオンライン授業の難しさの一つとして、教師と学習者との交流が通信機材を通した間接的なものであることを指摘している。さらに遠隔授業では、学習者同士の交流も間接的なものにならざるを得ないだろう。通常、教室で発表する場合は音声、資料だけでなく、身振り手振り、視線、うなずき、表情などの非言語コミュニケーションが用いられる。これらは伝える側にとっては伝えたい内容をより明確にするうえで有効であり、聞く側にとっては理解の助けとなる。しかしオンライン上では対面と同じように非言語コミュニケーションで伝えること、また

これらを読み取ることは困難である。ネットワーク環境上の理由で、カメラをオフにしたまま授業に参加する学習者もいるため、互いの表情や身振りを読み取れないまま、やりとりを続けざるを得ないこともある。その結果、発表が発表者からの一方的な伝達になる可能性がある。そのため、本授業では学期を通じて発表者と聞き手双方の心得として以下の３点を掲げた。発表者は、１）聞き手にとって聞き慣れないと思われる語彙や概念にわかりやすく説明を加えたり、別の言葉で置き換えたりすること、２）スライドに文字情報や図、イラストなどを載せて理解の助けとすること、一方、聞き手は、３）積極的に発表に耳を傾けるとともに、発表者の話をわからないままにせず、積極的に質問し自分の理解を深めることである。

次に学習者が本を選び発表するまでの準備をしやすくするための工夫である。ビブリオバトルは本を選んで最後まで読み、内容をまとめて発表するまで一人で行う作業が続く。今回はオンライン授業のため、学習者同士の情報交換の機会が少なく、対面授業の場合よりも孤独感を増す作業になると思われた。よって、まず本の選び方についてクラスの中で話し合い、アイディアを共有する機会を設けることで、学習者が本を選びやすいように配慮した。なかなか本が選べない学習者には、各々の日本語力と興味関心を配慮して、筆者からアドバイスをした。また読み進めの進捗状況について学期の中盤でアンケートを実施し、計画的に読み進められるよう個別に声掛けを行った。これは発表までに余裕を持って本を読み進め十分な発表の準備時間をとれるようにするためである。また、本の選定方法について、内容のまとめ方、何を意識して読むかなどについてメールや授業後のZOOMを通じた個人面談を用いて個別指導し、対面で指導を受けられない学習者の不安を軽減するよう努めた。さらに読書の進捗状況は学習者によって異なるため、メールで密に連絡を取り、学習者が段階を追って準備でき、安心して発表ができるように配慮した。

3.3　前半「身近なニュースに親しむ」授業内容

ここでは前半に行った「身近なニュースに親しむ」活動について紹介する。この活動をここで紹介する理由は、この活動が自分で選んだ素材を読んで概要を理解し、聞き手にわかりやすく伝えるための訓練として、後半のビブリオバトルにスムーズにつなげることを狙いとして行ったものだからである。以下、表２に授業の流れをまとめる。

表２　身近なニュースに親しむ：授業の流れ

活　動　内　容	詳　　細
１）気になる今週のニュースを選んで要約	
２）発表（毎回の授業で２名）	発表者がキーワード、イメージ図をパワーポイント（以下、ＰＰＴ）で共有
３）関連するテーマで話し合い	発表者が発題、話し合いをリード
４）振り返りシート記入	クラスで学んだこと、考えたこと

この活動は後半のビブリオバトルへスムーズに移行するため「聞き手を意識した発表」をすることを軸にして組み立てた。具体的には、まず、発表者には聞き手が内容をよく理解できるように、ニュースのキーワード、写真、イメージ図などを入れた視覚資料を準備するよう指導した。次に、発表者にニュースに関連したディスカッションテーマを掲げた話し合いをリードさせた。これは一方的な発表だけで終わらせず、聞き手にも共に考えてもらうために、どのような質問を投げかけたらよいかを考えるという点で、聞き手を意識させている。この指導は発表者が一方的な発表をすることにとどまらず、クラス全体がその内容をより自分に引き付けて考えられること、全体での質疑応答を活発にし、参加者全員が内容理解を深めることを目的としている。

また前半９回の間に、学期最後のビブリオバトル発表についてのガイダンス、意識付けの回を挟んだ。具体的には本の選び方、読み方の工夫、これまで先輩たちが選んだ本の紹介、読書の進捗状況に関するアンケートの実施である。教師と学習者個々でやり取りを行い、早期から後半のビブリオバトルに向け、学習者各々が計画的に準備できるよう個別指導した。

3.4　後半「ビブリオバトル」実施方法

「知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト」によると、「発表者は原則、レジュメやプレゼン資料などの配布はしない」とある。つまり５分の中で発表者が自身の言葉だけでいかにその本の魅力を語れるかが腕の見せ所となる。また、発表に続く質疑応答は２～３分となっている。しかし学習者の日本語力の差が大きいクラスでは、公式ルールのままでの実施は難しい。ともすると、発表者は一方的な発表をし、聞き手は未消化のままで終わってしまう。以上のことから、本授業で実施する場合は何らかの

工夫が必要であると考え、公式のビブリオバトルとは異なる特別ルールのもとで実施した。以下は今期、本授業で掲げたビブリオバトルのルールである。公式ルールからの変更点は、発表の助けとなる視覚資料の活用と発表後のディスカッション時間を長くしたことの２点である。以下それぞれについて説明する。

表３　クラスで掲げたビブリオバトルのルール

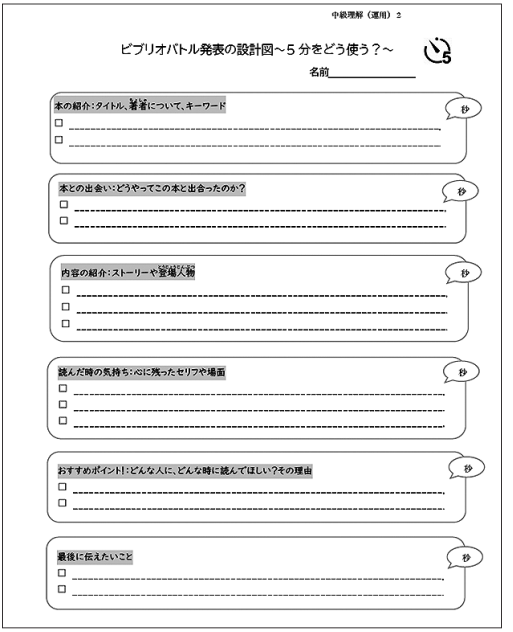
【このクラスのビブリオバトル ルール：相手にわかりやすい発表】
・ＰＯＰはＰＰＴを２～３枚使って作りましょう。キーワード、登場人物の相関図、イラスト、心に残ったセリフなどを入れてみましょう。
・原稿は作りません。ＰＯＰを手がかりに話しましょう。
・先生は原稿を添削しません。そのかわり発表のメモ、設計図づくりの段階でアドバイスします。本の選び方、発表のポイントについては相談にのります。
・評価について：チャンピオンにならなくても、準備段階、取り組み、発表そのもの、聞き手としての態度をすべて評価します。

まず、視覚資料の活用について述べる。発表の助けとしてＰＯＰを活用した。ＰＯＰとはPoint of Purchaseの略語であり、宣伝用の広告一般を指す。本授業では、本を紹介するためのキーワードやイラストなどの情報が入ったＰＰＴのスライドをＰＯＰとして用いた。ＰＯＰを使用した理由は発表者の日本語力を補い、また聞き手が本についてイメージしやすくするためである。ＰＯＰを用いることで発表者、聞き手双方に利点がある。まず発表者は、ＰＯＰにある情報をもとに、流れのある発表がしやすくなる。また、ストーリーを理解するためのキーワード、印象に残ったセリフなど、相手にわかりやすくするためにどのような情報をどのような順序でＰＯＰに入れるかについて工夫し、考える契機となる。一方、聞き手には、キーワードやイラストを手掛かりに具体的なイメージを持って発表を聞くことができ、発表後に質問もしやすくなるという利点がある。

次にディスカッション時間の延長である。公式ルールでは発表後に２～３分のディスカッションを行うことになっているが、日本語の授業で行う場合は、もっと長い時間を設定することが必要だと考え、10分に設定した。なぜなら、学習者によっては文を産出すること自体に時間がかかり、また質問者と回答者の間で日本語力に差がある場合は何度か表現を繰り返したり、言い換えたりしてやりとりをする必要があるためである。このような

理由から２～３分では質疑応答が終わらず、せっかく良い話し合いが進んでいても、未消化で終わってしまう可能性があると考えられる。むしろ発表後の話し合いに時間をかけることで学び合いと理解が深まると考えた。

以上､視覚資料の活用とディスカッション時間の延長について説明した。さらに本授業では、原稿を「読む」のではなく、ＰＯＰを手掛かりに「話す」発表をするように指導した。この理由は原稿を用意すると、原稿を「読む」ことに徹してしまい、聞き手を意識した発表ができなくなってしまう可能性があるためである。よって本授業では原稿ではなく発表のメモ代わりである図１の設計図を作成させ、発表時に活用するよう指導した。これは「発表設計図（５分の使い方計画）」（須藤、粕谷 2016）を参考にこのクラス用に必要な項目のみ取り出し、学習者が発表しやすい表現に変えて作り直したものである。学習者には、この図を使うことで、５分を有効に使った発表計画が立てられると説明したうえで、発表の順や内容は自らが効果的だと考える形式に自由に変えて構わないことを伝えた。その結果、この設計図を使用したことで、学習者は５分間で一定の流れのある発表をすることができた。


中級理解（運用）２

ビブリオバトル発表の設計図～５分をどう使う？～

名前＿＿＿＿＿＿

本の紹介：タイトル、著者について、キーワード　秒

本との出会い：どうやってこの本と出合ったのか？　秒

内容の紹介：ストーリーや登場人物　秒

読んだ時の気持ち：心に残ったセリフや場面　秒

おすすめポイント！：どんな人に、どんな時に読んでほしい？その理由　秒

最後に伝えたいこと　秒

図１　発表の設計図

3.5　「ビブリオバトル」各回の授業内容

本節では、全６回に渡る「ビブリオバトル」の各回の授業の内容と流れについて記していく。以下の表４は後半の授業の流れと詳細を示したものである。

表４　ビブリオバトルに向けての活動

回	活　動　内　容	詳　　細
11	日本人大学生のビブリオバトルの映像を視聴	良い点、工夫している点はどこか考え技を盗む
12	北大留学生の先輩たちの発表映像を視聴	
13	ＰＯＰの作り方	先輩たちが作ったPOPから学ぶ
14	ビブリオバトル発表①	発表⇒ディスカッション⇒他己評価シート記入
15	ビブリオバトル発表②	
16	発表の振り返り／アンケート	全体での振り返り⇒自己評価シート記入

まず11回目の授業では、全国大学ビブリオバトル決戦の映像を視聴し、12回目は留学生による発表例として、前期履修者の発表を視聴した。この２回で５分間の使い方、相手に訴える話し方、説明の仕方の工夫を話し合い、学んだ。

13回目の授業では、まず身近なスーパーや書店に設置してある実物を例として、相手に訴える効果的なＰＯＰについて学んだ。次に自分が読んだ本を聞き手に理解してもらうためにどのような情報を入れたらよいか、先輩たちの作品をもとにキーワード、心に残ったセリフなどのアイディアについて考えた。教室で行う場合はＰＯＰをＯＨＰでスクリーンに映し出しながら発表していたが、今回はＰＰＴを２～３枚使用し、画面共有しながら行うことにした。教室でビブリオバトルを行った際に使用したＰＯＰは１枚としていたが、これはポスター１枚の限られたスペースの中にいかに聞き手に訴える情報を載せるかを考えさせることも学習の狙いであったためである。また教室での発表の場合はＰＯＰ１枚を見せながら、足りない情報は対面で表情、身振り手振りを使いながら説明することが可能だった。しかし今回は3.2節で述べたように非言語コミュニケーションが使いづらい状況であり、学習者からの要望もあったことからＰＰＴを２～３枚使用

して行った。その結果、学習者は本に出てくる人物の相関図や印象に残った場面の複数のせりふなどを書き出すことが可能になり、よりイメージを広げた発表につなげることができた。

14回目、15回目の授業で３名ずつビブリオバトルの発表を行った。発表時間は公式ルール通り５分間である。続く質疑応答の時間は10分程度の多めの時間をとり、話し合いを深められるようにした。授業の最後に他己シート記入の時間をとった。クラスメートからのコメントはまとめてそれぞれの発表者に筆者からの講評とともに発表者にフィードバックした。チャンプ本は２回の発表が終了したのちメールで投票を行った。日本語授業で行う通常のスピーチの場合、日本語の流暢さ、語彙の豊かさ、発音の良さなど目に見えた日本語力で良し悪しが決められてしまうことが多い。しかしビブリオバトルは、日本語力そのものというよりは、いかにその本の魅力、面白さを自身の言葉で伝えたかという伝え方の工夫と熱意が問われる。よってチャンプ本を選ぶ際は「どの本を読みたくなったか」に着目して選ぶよう意識させた。

16回目の最後の授業では、チャンプ本を発表した。またなぜこの本が読みたくなったかのクラスメートのコメントを伝え、チャンプ本に選ばれた学習者からひと言感想を述べてもらった。続いて図２（Google図形描画）をクラス全員で共有し、ビブリオバトルをして「よかったこと」「大変だったこと」「工夫したこと」についてそれぞれコメントしたうえで質問し合う活動を行い、活動の振り返りとした。この方法は同時書き込みが可能であり、文字化されたものをその場で共有できることが利点である。書かれたコメントについてその場で相手に詳しく質問し合うなど、活発な話し合い

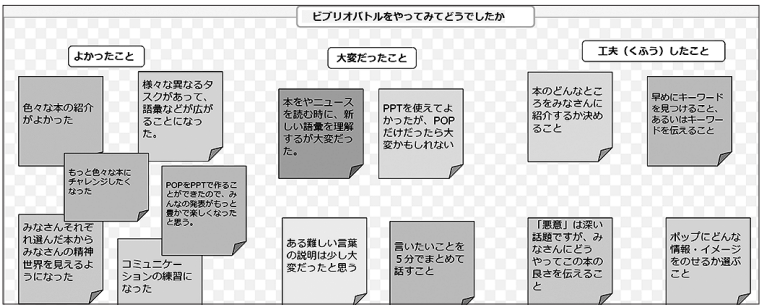


図２　クラス全体での振り返り（Google図形描画で作成：各コメントは学習者が記入　詳細は別表１を参照のこと）

につながった。

4. 評価方法

ビブリオバトルの評価内訳は、準備段階10％、発表20％、発表後の自己評価と振り返り10％である。準備段階で、計画的に読み進め発表準備ができているかを評価した。発表については伝え方の工夫、５分間の使い方のバランス、話し方、質問への回答、ＰＯＰの内容から総合的な観点で評価した。また発表のパフォーマンス度だけでなく、後の振り返りが重要な要素であると考え、自身の発表について客観的な内省ができているかについても評価を行った。以上の点は、クラス内での質問に対する答え方だけでなく、図３コメント／振り返り用紙に書かれた内容からも評価した。また聞き手からの感想や気づき、発表についてのアドバイスは、筆者からの講評とともにまとめて発表者にフィードバックし、発表者が今後の発表機会に生かせるようにした。

さらに今回の授業では「相手の立場に立ち、わかりやすく伝える工夫」と共に「積極的に聞くこと」も軸となっていたため、聞き手に対する評価も行った。聞き手が積極的に聞いたか否かは以下の２点を指標に評価を行った。１つ目は発表後に質問したかどうか、２つ目は以下に示す図３コメント／振り返り用紙の記述内容である。この用紙は、発表された本のおもしろい点について考えることで、聞き手にこの本を読みたいと思わせる

理解（運用）２

ビブリオバトル　コメント／振り返り用紙

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１．発表を聞いた人

発表者：　　さん／書名：『　　』

★この本についておもしろそうだと思ったところ（読みたい！と思ったポイント）

★この発表の良かったところ、自分の発表に生かしたいところ／感想／アドバイス

２．発表した人

★うまくいったところは？／感想

★あまりうまくいかなかったところは？／どうすればうまくいったと思うか

図３　コメント／振り返り用紙

ような発表はどんなものだったのかを考えさせ、さらに自分の発表に生かしたい点について考えさせる内容になっている。ここに書かれた気づきや発見から、聞き手の発表に対する理解とともに、それを自らの発表に引き付けて考えているかを測り、この点を積極的な聞き手としての評価とした。

5.　授業の結果

ここでは最終回に実施したビブリオバトルに関する学習者へのアンケート結果から今回の実践を振り返ってみたい。以下はアンケートの質問内容の抜粋である。

表５　アンケートの質問と回答の選択肢：抜粋

質　問　内　容	選択肢の内容
発表をするとき、どんなことに工夫をしましたか。	・聞きやすい声の大きさ、スピード ・言葉の説明を丁寧にする ・５分間の使い方(伝える順序と内容) ・その他（自由回答）
ＰＯＰを作るとき、どんなことに気をつけましたか。	・キーワードを入れた ・イラストや写真を使用した ・字を大きくして見やすくした ・説明の流れに合うように作った ・その他（自由回答）
あなたのＰＯＰは、聞いている人にその本の魅力を伝えられましたか。	自由回答
オンライン上での発表は教室での発表と違い、おもしろいこともあると同時に大変なこともあったと思います。やってみてどうでしたか。	自由回答

5.1　ビブリオバトルをする際に学習者が工夫したこと

「発表をするとき、どんなことに工夫をしましたか」という選択式質問に対して、全員が「ゆっくり、わかりやすく話した」「ＰＯＰに入れるメッセージ、イラストなどを工夫して相手にわかりやすくした」を選んでいる。以下は自由回答の一部である。[2)]

表６　発表の際の工夫

①話し方、伝え方
・この本を読み終わったときの明るい気持ちをわかってもらいたかったです。しかし今回はオンラインでジェスチャーと顔が使えないので、ずっと元気に話しました。
・ストーリーは複雑なので、作者が一番伝えたいことをみなさんに伝えました。
・今までよく話すスピードが速すぎるだと言われましたので、今回のコメントでゆっくりでわかりやすかったと書いてあってうれしかったです。
・練習の時、自分の声を録音して、発表を聞くみなさんの気持ちになって考えて工夫した。

②ＰＯＰ
・本のキーワード、印象的なところを引用しました。
・説明の順番に合うように作りました。

以上の回答から、相手にわかりやすい話し方、伝え方の工夫を具体的に学習者が行っていたことがわかる。また、ＰＯＰの作り方、見せ方にも工夫が見られ、本実践の目標として掲げた「相手の立場に立ちわかりやすく伝える」ことについては概ね達成できていたと考えられる。

5.2　学習者が考える本活動の利点

以下は「ビブリオバトルをしてよかったこと」についての学習者からのコメントである。

表７　学習者が考えるビブリオバトルの利点

①　オンラインでも楽しくできてとてもよかったと思います。オンラインは皆さんのジェスチャーや表情がうまく伝えられないというところがあるので、ＰＯＰをＰＰＴで作ったのは状況にあういい方法だったと思いました。

②　オンラインで発表するときはそんなに緊張していなかったと思います。

③　スライドが目の前にあるので、メモを書かなくても発表しやすかったと思います。

④　自分が好きな本について、ＰＯＰを楽しく作りました。

⑤　簡単な本なら、本を読めることに気づいてとてもいい経験でした。

⑥　日本語で本を全部読むのは初めてで、みなさんが紹介してくれた本も面白かったので、今回のビブリオバトルはこれからも色々な本に挑戦する勇気と出発点になった。

⑦　本の内容だけでなく、発表してくれた人の精神的なことが見えた。

まず①から③は、オンラインでビブリオバトルを行った利点についての意見である。ビブリオバトルは本を読んだ感想をただ伝えるのではなく、相手にこの本が読みたいと思わせるようにアピールすることが求められる。学習者の多くは自分が選んだ本の良さが対面ではなく画面上で聞き手に十分伝えられるか未知の経験で不安だと述べていた。しかし①と③の回答では、視覚資料としてのＰＯＰを活用できたことで発表がしやすくなったと述べており、オンラインでのビブリオバトルについて、一定の手ごたえがあったと前向きに捉えていることがわかる。②の感想を書いた学習者は、発表前にオンラインでの発表が初めてのため、うまくできるかどうか不安だと訴えていた。しかし実際に行ってみた結果、思いのほか緊張せずにできたという気づきを述べている。

なお⑤から⑦は、ビブリオバトル自体の利点についての意見である。⑤と⑥の記述から、本実践が日本語の本を読むことのきっかけになったことがわかる。⑦のコメントについては、今回、読者によって作者のメッセージについてとらえ方が異なる作品を選んだ学習者が数名いたため。発表後の質疑応答の時間に学習者間の深いやりとりがなされたことから出たコメントであると考えられる。公式ビブリオバトルのＨＰには「人を通して本を知る、本を通して人を知る」というキャッチフレーズが掲載されているが、今回、学習者たちは紹介された本の内容のみならず、本を通じたそれぞれの考え方、価値観についても深く話し合い、互いを知る機会になったことが窺える。

5.3　学習者が考える本活動の問題点

次に活動の問題点についてのコメントを考察する。

表８　学習者が考える活動の問題点

①　パソコンの前に発表するは対面の授業より緊張感が少なかったが、クラスメートのリアクションなど見えなくて、あまりよくないと思います。
②　みなさんの反応を見えないのが残念でした。聞こえているかどうかもわからないので、ちょっと不安でした。
③　教室で発表するときは、もっと面白い話し方ができると思います。

上記のコメントはすべてオンラインによる発表についての不安、やりにくさについての声である。今回はオンラインによる発表のため、より聞き手を意識した発表をするよう学期を通じて学習者に意識させた。しかし上記のコメントにあるように、どうしても発表者側は聞き手からの反応が見えず一方通行の伝達をしているように感じてしまうことが明らかになった。小野寺他（2020）はオンライン授業においても、自身の考えを主体的に発信すると同時に、相手の主張も受け入れ、相互のやり取りを通じて新しい価値観を生み出す「対話型学び」が必要であることを述べている。そして「対話的学び」をオンライン授業で担保するために、教師による配慮や工夫が必要であることについても指摘している。ここで言われている「対話」は発表後の話し合い時だけにとどまらず、発表時にも行われるべきであろう。ではオンラインでの発表時に、発表者と聞き手が対話をするためにはどうしたらよいのだろうか。対面で用いられる話し手、聞き手双方の目線やうなずき、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションに代わる手段の１つとして、ZOOMの「反応ボタン」の活用が挙げられる。これはボタンを押すことで、画面上に「拍手」か「いいね」の２種の絵文字を表示できる機能である。聞き手は発表を聞きながら、随時これらの絵文字を表示することで、発表についての反応を示すことが可能になり、発表者は聞き手が自分の発表についてどのように感じているかがわかる。本実践を行った学期は、筆者はZOOMを使用するのが不慣れであったこともあり、この「反応」機能を発表時に用いることに思い至らなかった。今後、教師側から学習者へ、発表時に可能な限りカメラをＯＮにして自分の顔を映し出し、反応を可視化することに加え、反応機能を使って聞き手に反応を伝えることを促す必要性があると痛感した。

6.　まとめと今後の課題

本稿で報告した実践は「本を選ぶ」「読む」「まとめる」「相手に伝わる発表をする」という通常のビブリオバトルの活動に、オンラインならではの「相手への使え方の工夫」という点を加えて行った。中級の日本語授業でビブリオバトルという活動を行った意義は、学習者が現在の力より一段上のレベルに挑戦することによる学びの実感を得られること、クラス内に日本語レベルの差があっても挑戦しやすい活動であることの2点である。さらにこの活動をオンラインで行うにあたり、教員がオンライン上でのコミュニケーションの工夫について授業内で意識して学習者に考える機会を与えたことで、学習者は対面時よりさらに相手を意識した伝え方に配慮して実践することができた。

しかし本実践には課題も残されている。5.2節で述べた「対話型学び」をオンライン授業で担保するための方法については、今後もさらに模索が必要である。具体的には、ZOOMでのやりとりをいかに対面でのそれに近づけるか、学習者からの授業に関するコメントなどから詳しい検証が必要であると考える。また、今回オンライン授業を行ってみて教室で行う授業とは異なるオンラインならではの利点があることも見えてきた。学習者からは「教室よりオンライン上の授業でのほうが発言しやすい」「その場で画面上に写真や文書を共有しながら議論できるのがいい」などの声もあがっている。これから日本国内でも教育のＩＣＴ化が進むと考えられ、オンラインを活用した日本語教育の場が増えていくであろう。今後、さらにオンライン授業ならではの強みを生かし、学習者の学びにつながる実践を工夫して行っていきたい。

注

１）深澤（2017）によると、21世紀型スキルとは、グローバル化が急速に進む21世紀で働き生き抜いていくために必要な力であり、従来の知識や情報重視のスキルではなく、コミュニケーションや協働により新たな価値を生みだすスキルのことである。加えて深澤は「ビブリオバトルのスピーチを準備する際には聞き手の反応を想定して説得的に話すことが求められ、21世紀型スキルとして必要な項目として合致する」と指摘している。

２）学習者の誤用も含め、原文のまま記載する。

別表１　学習者の誤用も含め、原文のまま記載する。

【ビブリオバトルをやってみてどうでしたか】
●よかったこと ・色々な本の紹介がよかった。 ・様々な異なるタスクがあって、語彙などが広がることになった。 ・もっと色々な本にチャレンジしたくなった。 ・ＰＯＰをＰＰＴで作ることができたので、みんなの発表がもっと豊かで楽しくなったと思う。 ・みなさんそれぞれ選んだ本からみなさんの精神世界を見えるようになった。 ・コミュニケーションの練習になった。
●大変だったこと ・本やニュースを読む時に、新しい語彙を理解するが大変だった。 ・ＰＰＴを使えて良かったが、ＰＯＰだけだったら大変かもしれない。 ・ある難しい語彙の説明は少し大変だったと思う。 ・言いたいことを５分でまとめて話すこと。
●工夫したこと ・本のどんなところをみなさんに紹介するか決めること ・早めにキーワードを見つけること、あるいはキーワードを伝えること。 ・「悪意」は深い話題ですが、みなさんにどうやってこの本の良さを伝えること。 ・ポップにどんな情報・イメージをのせるか選ぶこと。

参考文献

泉村靖治、青山禎尚（2014）「学校教育の場におけるビブリオバトルの教育的利用についての研究―主体的な学習への仕掛けとして―」『兵庫県教育委員会　平成26年度　研究紀要』第125集　pp.39-46

小野寺基史、井門正美、梅村武仁、野寺克美、松橋淳、小沼豊（2020）「双方向遠隔授業システムを活用した対話型授業の構想と実践」『北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要：教職大学院研究紀要』10号　pp.1-13

小池浩子（2002）「遠隔授業の抱える課題と効果的授業法―教員のコミュニケーション能力の役割―」『信州大学教育学部紀要』105号　pp.85-96

須藤秀紹、粕谷亮美（2016）『ビブリオバトル実践集　読書とコミュニケー

ション　小学校・中学校・高校』子どもの未来社
辻本桜子（2019）「留学生の日本語授業におけるビブリオバトルの実践報告と実践方法に関する提案」『日本言語文化研究』第24号　pp.1-19
深澤のぞみ（2017）「日本語教育におけるパブリックスピーキング―21世紀に必要な学びの一つとして―」『金沢大学留学生センター紀要』20号　pp.1-19
山路奈保子、須藤秀紹、李セロン（2013）「書評ゲーム「ビブリオバトル」導入の試み―日本語パブリックスピーキング技能向上のために―」『日本語教育』155号　pp.175-188

参考資料

「知的書評合戦ビブリオバトル　公式ウェブサイト」
http://www.bibliobattle.jp/how-to-hold/online（2020年 8 月24日アクセス）
北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部（2019）「北海道大学日本語スタンダーズ2019年度版」
https://isc.high.hokudai.ac.jp/pdf/jpstandards2019.pdf

（やまもと　さやか　高等教育推進機構国際教育研究部非常勤講師）

Report on a “Biblio-Battle” in Online Class: For Intermediate Level Japanese Learners

YAMAMOTO, Sayaka

This paper is reporting the practice of “Biblio-Battle” which is a social style of book reviewing in a Japanese intermediate class done online. This study aims to clarify 1) how online “Biblio-Battle” affects Japanese intermediate learners, and 2) what research task are necessary from now on concerning this practice. The way of communication in online classes was limited compared to normal face-to face class. Therefore, the lecturer encouraged each student to be aware of the audience when they make speeches online. As a result, students could make a creative and original presentation paying attention to the audience. Furthermore, both the speakers and audience discussed deeply about the book review through online presentation and they could learn the fun of reading Japanese books.

The study concludes that “Biblio-Battle” through online classes could be meaningful activities for Japanese intermediate learners from the view point of comprehensive Japanese language training.